

Handwritten text in a stylized script, possibly a signature or a line of poetry, written horizontally across the lower portion of the page.

石川達之

流れゆく日々

I

新潮社版



なが
流れゆく日々 I

昭和四十六年十二月十日 印刷
昭和四十六年十一月十五日 発行

定価五五〇円

著者 石川 達三
いし かわ たつ ぞう

発行者 佐藤 亮一
さとう りやういち

発行所 株式会社 新潮社
しんしやう

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(220)二三番(大代)
振替東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

流れゆく日々
I

(昭和四十五年)

□十月一日(木) 晴

午後來客四人。浜野君たいへんに元氣になり、體質が變つたという。私の隨筆集を出版する相談をうける。自分ではあまり積極的な氣持はないが、せつかくすすめてくれるのだから有難く思つて、万事よろしく頼むことにする。

アラブ連合ナセルの国葬。彼は國家という組織の中心に居た。そういう政治的人間というものの在り方はよく解らない。ナセルの(自己)というものはどうなつていたのか、理解できない氣がする。私たちは職業分類の上では自由業と言われている。自由というのはそれだけのことであつて、大したものではない。わがままな、そして小さな職業だ。文士たちは自己とか個性とかいうことをしきりに問題にする。それを問題にしているあいだは、まだ人間が幼稚なのかも知れない。

江藤淳「漱石とその時代」を読む。いわゆる伝記ものの甘さが一滴も無いのが良い。私は漱石については全集をほとんど全部読んでいるが、伝記的な面は全く知らなかったので、おどろくと同時に、彼の作品を改めて考え直すことが出来そうに思われて來た。芸術作品は作者の個人的な経歴などとは無關係に、ただそれだけで鑑賞すべきだと私はいつも考えていたし、それは間違つてはいないと思うが、その事とは別に、作者の経歴と作品との關係を考えることには興味があ

る。江藤君に依れば「道草」などはほとんど漱石の私小説であつたらしい。そのように、身辺の事実に近いことをほとんどそのまま事こまかに長々と書き綴つた漱石の創作態度には、私は賛成しない。

結局漱石は漢学、漢詩の素養があり、俳句の素養があり、英語英文学についての学識があり、そして最後に小説を書いたが、その小説も文人墨客的な態度で書かれたものであつて、小説に生涯を賭けたというようなものではなかつたと思う。つまりディレッタントであつた。私が漱石についてどうしても^{つまず}跌きを感じるのはそういう所であるらしい。

前後二巻、江藤君にとつては大変な労作であるが、この労作は、経済的にはどのくらい報いられるだろうか。

□十月二日(金)晴

朝からゴルフに行く。相模クラブ。快適な秋の一日。沢野久雄と廻る。彼のゴルフは何だか女性的だ。

毎日新聞夕刊のコラムに池島信平君が寄稿している。民間放送の中にひどく猥褻なものがあるのを指摘して腹を立てているのだ。私はその説に賛成だが、同時に文藝春秋社のオール読物や週刊文春の中にもかなり猥褻な部分があるのには賛成できない。世の風潮が淫靡になつているのだから、それに歩調を合わせなくては出版商売が立ち行かないということも解る。しかし週刊誌の中でも週刊朝日は猥褻記事のせてはいない。何百人の社員をかかえているのだから、心ならずも商策として猥褻なものをも扱うのだという釈明もあり得るだろう。しかし岩波はそんな仕事をしてはいない。

雑誌の方はまだいいとしても、猥褻以外に何の意味もない丁某などの書いたものを、出版部が単行本にして出しているのには腹立たしさを感じる。

夜、電話二つ。一つは読売文化部高野君から、対談会の相談。連載対談の第一回をやってくれと言うが、相手は何とかいう若い前衛的な建築家を予定しているがどうかと問われる。まるつきり知らない人で、対談をやるうにもとっかかりが無い。再考を約す。

もう一つはロシヤ文学をやっているという某氏から。目下来日中のヴェトナムの作家たちが日本の作家に会いたいという。彼等は私を指名しているので都合をつけて貰えまいかというのだ。なぜ私を指名したのか見当がつかない。私の作品がヴェトナム語かフランス語かに訳されたという話も聞いていないし、彼等が日本語の小説を読んだとも思えない。月曜日三時に東急ホテルに来てもらえまいかと世話人は言ったが、先方は私に会いたくても、私の方では彼等に会う必要を感じていない。また時間をやりくりして指定されたホテルまで出かけて行くだけのサーヴィスを、しなくてはならぬという理由も見つからない。どうもあやふやな話だ。私の方にも予定があるから多分行くことはできないだろうと返事をして置いた。

私の知る限りでは、来日した作家たちの中では中国人が一番礼儀正しくて、こちらが応待に困るほど鄭重であった。老舍、劉白雨など、わざわざ通訳をつれて訪ねて来た。別の中国作家たちが来日した時にも同じような形式の訪問を受けた。そのとき私はやはり中国の古い歴史と古い文化との一端を見たように思った。いま政治的には共產主義になっても、そんな事は或る期間だけのことであって、古い文化は決して根こそぎにされてはいないのだ。

ところが日本の若い学生共產主義者たちは、礼儀作法を無視するのが最も新しいことだと信じ

ているらしい。大学の改革を要求することと、教授たちを尊敬することとは別でなくてはならない。しかし彼等は総長以下の教授たちを頭から輕蔑しながら大学にかよい、大学の課程を修了しようと考えている。その事自体の矛盾を何と思つていいのか。どうも解らない。

眼科の北村博士から聞いたはなし。……中年以上の患者は外来でやつて来ても礼儀正しく挨拶をし、病状を説明して診察を乞うのが普通である。しかし近頃の青年たちの中にはひどい患者がいる。黙つてはいつて来て医者の前に坐る。病状をたずねても答えようとしない。(見たら解るだろう、お前は医者ではないか)と言うそうだ。日本の自由平等はこういう形でしか發達できなかったものようである。これを正当な姿にまで修正するのは容易なことではあるまい。

□十月四日(日) 小雨

文化人類学の中根千枝氏によると、(アッサム地方のカシ族は全身を衣服で掩い、同じくガロ族はみんな《超ミニ》で、女でも胸に十センチ腰に十五センチの布しか付けていない。そのどちらが性について敏感かと言うと、前者カシ族は非常に鋭敏な感覚をもつのに、後者ガロ族は一緒に男と水浴びをしても、肌が触れあつても、一向にどうということもない)と言う。いかにもそうだろうと思う。

東京の酒場の女たちは太腿までむき出しにした洋服で客席に坐り、別に恥ずかしそうにもしてない。たまたまその女が和服を着ている時に、着物の裾を太腿までまくつて見ろと言うと、恥ずかしがつて強く拒む。文化人類学を持ち出すまでもない。からだを包むことによつて一時的にでも女の羞恥心は強くなり、羞恥心はそのまま性感覚につながる。また女がからだを包んでいる

のを見ることによつて、男はその包まれて見えない内部に心をひかれる。久米仙人が通力を失つて墜ちたのは、川で洗濯をしている女の白い脛を見ただけのことだった。むしろ脛だけしか見えなかったから墜ちたと言つてもいい。それがビキニ型の水着をきた女であつたら、仙人は黙つて飛び去つたかも知れない。

現代は女が露出症のようになってゐる時代だ。中根千枝氏の研究から推論すれば、彼女等のはほとんど全部は性的不感症に近いかも知れない。つまりは自分の性感覚を日常的に浪費してゐるのであらう。ガロ族の場合にはその服装は伝統的な民族の風習であるが、日本の女の場合は單なる流行にすぎない。愚かな流行である。その点、女の和服は現代生活には不都合なところも多いかも知れないが、女のひそかな仕合せを培うためには最も賢明な服装であつた。その包まれた中に在るものを、男たちはつい美化して考へてしまふ。短いスカートを剥き出しにされた太腿は、あまりにあからさまで、どんな夢をも託する手だてがない。

日本語のつしみ、つましさ、などは、包むという言葉から出たものであらうか。語源は知らないが、何事もあからさまにしない、剥き出しにしないことに、日本人は昔から一種の美を感じてゐたのだと思う。謙虚という言葉とともに、戦後はこれがほとんど失われてしまつたようだ。

江藤淳「漱石とその時代」前後二巻——これはもつと続けるつもりなのか、第一部第二部としてある——を讀了。少年期青年期をかなり不幸な境遇の中で過した人であつた事を知る。青年期以後は大変な努力家であつたらしい。しかし作家としては、私にはどうしても大文豪とは考えられない。彼には不当に大きな評価が与えられているように思う。それは漱石の作品が読者に与える一種の親近感から來たものであらうか。そうした世評の歪みはしばしば有ることだ。私は山本

周五郎をほとんど読んでいないが、彼の死後の人気の高さはその作品の庶民性によるものではないのか。作家としては海音寺潮五郎の方がずっと優れているように思う。しかし海音寺は取つきにくいのか、山本周五郎のような人気にはなって行かない。

漱石は小説よりも俳諧や新体詩のような物の中で異常な才気を示している。私はその発想の幅のひろさに驚く。横光利一は（俳句を考えていると自分の思考の幅がわかる）と私に言ったが、漱石はその幅がまことに広い人であつた。彼の小説の面白さも、そうした思考の幅の広さによって支えられている部分が少なくないように思う。

夜九時、日野西義輝から電話。早稲田大学総長選挙の結果、理工科の教授村井資長が現在の時子山総長を破って当選したことを報じ、（今後とも宜しく頼む）と言う。日野西は村井の実兄にあたる。私とは中学の同級生である。九月二十五日駒込吉祥寺で金沢覚太郎の葬式があつたとき、私は村井君に会つて選挙の様様を聞いた。彼はあまり期待していなかつたようだし、私も現職の人が強いのではないかと思つていた。村井の当選は彼の人柄の良さによるものか。

いずれにもせよ、これからの大学総長は多事多端であるに違いない。現に早大では一部学生がまだ騒いでいる。村井の当選も、この新しい人による新しい大学運営が期待されたのかも知れない。一方、学生運動もそろそろ反省期にはいるべきではないだろうか。大学の改革は時間がかかる。ところが学生は一刻の猶予もしようとしないかつた。せいては事を仕損ずると昔の諺は言つてゐる。時間をかけて事を運ぶことができるようになったら、それからが（大人）というものだ。

□十月五日（月）小雨、曇

午後、日比谷でアメリカ映画「要塞」を見る。内容はつまらなかつたが天然色フィルムの色が

きれいになったのに感心する。先日ゴルフ・クラブでカラーテレビを見て、その色が美しくなったのに感心した。私はカラーテレビが嫌いで今日まで白黒テレビで頑張つて来たが、そろそろカラーの機械を買つてもいいと思つた。

夜、Gクラブの例会に出席。防衛庁官房長という人の防衛問題についての話を聞く。型通りの概況報告みたいな、まことに役人らしい、香りもなければ味もない、中身の面白さも何もない、詰らない話ぶりだった。こんな男を官房長にして置いてもいいのかしらと思つた。

日本の防衛機構は国民世論の分裂をそのまま反映して、まことに中途半端だ。陸上常備軍十八万、予備軍に相当するもの約三万くらいという。是では本格的な戦争など出来るはずもない。戦争になったら至急に徴兵制をとったり志願兵を募つたりするのであるが、日本の憲法には非常時に対処する法律はない。非常時立法をやろうとすれば国会は大紛糾するだろう。どうするつもりなのか、私には解らない。

中曽根康弘という人はどうも虫が好かない。性が合わないというのかも知れない。才気煥発で弁舌に巧みであるらしいが、その才気を私は何だか信じられない気がする。つまりその時々にかつこ良いことばかり言っているのではないかと思う。嘗て彼は首相公選運動をやつてた。私が賛成の意を表したところが、向うから会いたいと言つて来た。政治家から御馳走されるのは厭だからと言って、私の方から彼を銀座浜作に招待したことがある。ところが中曽根はいつの間にか首相公選論を言わなくなつて、佐藤四選問題に關しては、(二年後には自分が立候補するが、今回は佐藤を支持する)と語つた。首相公選論をなぜ中止したのか。いつから中止したのか。その説明はなかった。彼はそういうちゃんぽんな男だ。日本の防衛もどうやらちゃんぽんなところがあるような気がする。

時間が少し余ったので銀座の表通りを歩き、買物をする。こんな事は年に一度もない。靴屋と靴屋をのぞき、虎屋をひやかし、銀食で酒の肴を二つ三つ買い、不二屋でフランス・パンを買い、文明堂でドラ焼きを買った。必要に迫られている訳でもないのに、どうでもいいような買物をするという事の楽しさを、少しばかり味わう。もともと私には買物の趣味はない。選ぶというのは面倒くさい事だ。しかし選ぶことに買物のたのしみがあるのだ。いつも買う煙草を今日も買うというのでは、何の楽しみもない。

□十月六日（火）快晴

来客、新潮社酒井君、読売新聞社牧野君、ブック・クラブ山本君。

山本君とは今年のはじめから対立がつづいている。ブック・クラブは創立当時、著者に支払う印税を五%にしようとしていた。理由は販売その他に経費がかかるのと本を安く売る為だと言う。そして小売店の利益は定価の三〇%、大取次は一〇%だと言うのだ。私はいかなる事があっても印税一〇%という従来の習慣を切り下げてはならぬ事を主張し、文芸家協会でも説明し、山本君と対立した。その後先方もすこし妥協して七%で著者の賛成を求めて来たが、私は絶対に譲らなかった。稿料や印税は作家の生活基盤であり、印税率は販売経費の如何にかかわらず確保しなくてはならない、文芸家協会も職能擁護の団体として、それを主張するのが当然である、というのが私の持論であった。山本君から第一回選定図書として「金環蝕」を求められたが、印税率についての協定ができていないからと言って、私は保留した。

ところが山本君は協会の会長丹羽文雄、理事長井上靖を説いて、彼等の本を印税七%で契約してしまった。七%で契約をした丹羽や井上の無責任さに私はひどく腹を立てた。山本君で見れば

鬼の首を取った気持であつたらう。あとの人たちはただ丹羽井上に習つて、みんな七％にされてしまふ。是では協会も職能擁護の団体だなどとは言えないはずだ。他に七％で契約を終つた協合理事に、田地文子、松本清張があり城山三郎がある。理事たちが一般会員の立場を不利にしてしまつたのだ。私は面会を求めて来た山本君を電話口でどなりつけ、面会を拒絶したことがあつた。その後、この七月の会合のとき、先方の会長野間省一氏と私との間で、印税は三万部まで七％を認めるが、三万以上は八％、五万以上は九％、十万を越えた分に対しては一割という構想で話しあいがつき、文書による暫定協定ができた。この話しあいの席で丹羽文雄は、(これが今日の収穫や……)と言つて喜んだが、それを喜ぶぐらいなら、なぜ彼が率先して七％で契約をしてしまつたのか。そういうところが如何にもあいまいである。

今日の山本君の用件は、小説「四十八歳の抵抗」をブック・クラブ版にほしいということだつた。印税は七％だという。私は絶対に八％を主張した。たつた一％の差は金額にして何程のものでもない。しかし私は譲らない。協会とブック・クラブとの団体契約はできたが、私の自説が變つたわけではない。本来ならば一〇％を主張したいのだが、それでは話にならない。私は八％を実行して、七％という印税率が確定的なものではない事の実例を作りたい。山本君はどこまでも七％を確保したい。だから会談は物別れになつた。当然のなり行きである。彼は何か便法はある。承知の上だ。私はこの件に関してはどこまでも自分の主張を貫く。

来年の六月、両者の暫定協定は再検討される。その時にもう一度、作者の当然の権利を主張しなくてはならない。しかしブック・クラブも当初の予定ほどには事業がうまく進展していないらしい。

夜、少しばかり読書。支那の儒家のはなし。孟子の性善説と荀子の性悪説について考える。私にはどうも人間の本性が善であるとは思われない。

自然界の動物のあいだには元より善悪ということはない。小動物を殺して喰うことも悪ではないし、牝の母性愛だって別に善ではない。ただ有るものは本能的な叡智と行動とだけである。したがって人間に在っても、本性として持っているものは善でも悪でもない、いわば本能的なエゴイズムだけではないかと思う。その、本能的なエゴイズムは、道德世界の基準に照らして見れば、まぎれもなく悪の姿をしている。つまりその悪の姿は、幼い子供が何の努力もなしに身につけているものである。満二歳の子供は、人間の大人が持っているあらゆる悪の要素を、ちゃんと備えている。貪慾、嫉妬、虚栄心、権勢慾、阿諛、虚偽……。それはほとんど全部、本能的なエゴイズムから発している。そして道德的善の萌芽と見られるような兆候は、まだどこにも無い。

人間の子供が道德的悪の衝動をみずから抑え、道德的善を身につける為には、多量の教育を必要とする。その過程には五年十年の苦しい抵抗の時代がある。むしろ善を身につけるまでの子供たちの苦しみを、可哀そうだとさえも思う。私は自分の子供を育てながら、教育というものは非常に理不尽なもの、もしかしたらきわめて不当な要求ではないかということを、幾度か考えたことがある。

□十月七日（水）快晴

午後散歩に出て花の種を買う。今年は庭の隅の木犀がかなり咲いた。門の脇の大きい方の木は、ずいぶん手数をかけてやったが、一向に咲かない。むずかしい木だ。

ブラジルのサン・パウロ新聞の本社社長来訪。今春から約束の、懸賞小説の候補作品を持って来て、最終銓衡を求められた。来年正月に結果を発表するという。同時に正式な招待状を以て、私をブラジルに招待するという申し出を受けた。滞在は二カ月でも三カ月でもいいと言う。

あれからちょうど四十年になる。あの時は片道四十五日もかかったが、今はまる一昼夜あまりで行かれるらしい。さて、行こうかやめようかと、迷う。外国旅行は七割までが苦痛に耐えることであって、旅の楽しさは二割かそこいらだ。若いうちは七割の苦痛があまり気にならないし、それも亦もの珍しさの中に数えられる。しかし年齢がすすむにつれて、苦痛の方が次第に重く感じられる。

島根県の住人宮井一郎という未知の人から「現代作家論」という新著到来。何気なく開いて見ると、この老人は漱石を深く研究した人であるらしく、私が数日前読了した江藤淳の漱石研究のなかの、「登世という嫂」と漱石との関係について、強烈な反論を書いていて、面白かった。

嫂登世とのかかわり合いについて、私は江藤君の本を読みながら、その解釈の仕方がどうも強引で不自然だと思っていた。先ず筆者の想定があつて、あらゆる資料をその想定のもとに証明として使っているように見えるのだが、そこに無理があつて、読みながら私は信じられなかった。宮井氏はそういう江藤君の証明を牽強附会として痛烈に否定しているが、私はどうもこの人の否定の方に賛成したい。

それに関連しての感想であるが、作家が小説を発表すると評論家が批評を書く。ところが私の三十余年の経験では、評論家を書いてくれた批評を読んで身に沁みる思いをしたことは一度もない。何かしら思いも寄りぬ事ばかり言われているようで、褒められても嬉しくないし、貶される

とその的外れに腹が立つようなことが多かった。それが、江藤君の「登世という嫂」の場合はどうなのか、よくわからないが、先ず評論家自身に何か言いたい事があって、それを無理矢理に手頃な一つの作品に当てはめて証明しようとする、そういう批評を私たちはたびたび浴びせられて来たのではないだろうか、という気がした。若い批評家たちは、一つの作品を批評するに当って、何か巧いことを言ってやろう、という風な功名心が動いているらしい。作家というのはどうも、批評家たちの功名心の犠牲にされているようなところが、無いでもない。

□十月九日（金）快晴

朝日学芸部A君宛に速達を出す。

私はA君から原稿依頼を受け、指定された締切日の九月二十七日に原稿を速達で送った。ところが先方は何か自分の方の手順が変ったと称して十日以上経っても原稿を掲載しない。なにも十日経ったから原稿が使い物にならないという訳ではないが、いつも自分の方の都合ばかりを楯にとって筆者を無視するような朝日のやり方に我慢できなくなり、昨夜電話をかけて原稿をとり戻した。書き改めたい所があるという口実を使ったが、もうこの原稿を渡す気はない。同時に、十一月以降毎週一回ずつの連載随想をほしと言っていたが、それも手紙で拒絶した。

朝日の無礼なやり方には前から腹を立てていた。数年前も学芸部M君が来て連載小説を頼みたいが、幹部社員の希望で、主題の概要を知らせてほしいと言った。どこの新聞雑誌でも作家から小説の内容を聞いてから取捨をきめる所はない。内容は作家の責任に於て書かれるのだ。それを信用できないくらいなら、頼まない方がいい。その時は朝日の九州本社の方から異議が出たらしい。また「人間の壁」のような作品を書かれると困るからあの男はやめたいということであっ